

光（祝福）と闇（呪い）の女神たち

『マビノギオン』（*Y Mabinogion*）の女性像をめぐって（1）

——「マビノーギの四つの物語」（‘*Pedair Cainc y Mabinogi*’）から——

中野 節子

11世紀の後半頃、一冊の本の形にまとめられたであろうと考えられている『マビノギオン』（*Y Mabinogion*）は、神話・伝説・民話等、ウェールズ地方に暮らしたケルト民族の物語文学の総集集ともいべき散文物語集である。全部で11編の物語から成り立っているが、その内容からA. マビノーギの四つの物語（ダヴェドの大公プイス（*Pwyll Pendefig Dyfed*）、スィールの娘ブランウェン（*Branwen ferch Llŷr*）、スィールの息子マナウイダン（*Manawydan fab Llŷr*）、マソヌウイの息子マース（*Math fab Mathonwy*））、B. カムリに伝わる四つの物語（マクセン・ウレデグの夢（*Breuddwyd Macsen Wledig*）、スイツとスエヴェレスの物語（*Cyfranc Lludd a Llefelys*）、キルッフとオルウェン（*Culhwch ac Olwen*）、ロナブイの夢（*Breuddwyd Rhonabwy*））、C. アルスルの宮廷の三つのロマンス（ウリエンの息子オウアイン、あるいは泉の貴婦人（*Owain fab Urien, or Iarlles y Ffynnawn*））、エヴラウクの息子ペレドゥル（*Peredur fab Efwrawc*）、エルビンの息子ゲライント（*Gereint fab Erbin*））という三つのグループに分類できる。¹¹

これらの物語は、主として、中世の宮廷を中心に、宴の席での物語の伝承を専門的に請け負っていた宮廷詩人や、数々の物語を携えて国から国へ自由に旅していた吟遊詩人たちによって語り伝えられていったと考えられる。それぞれの物語の中には、数々の男や女の登場人物が現れてくる。その中でも、この11編の物語集『マビノギオン』の中心となる物語群「マビノーギの四つの物語」（‘*Pedair Cainc Y Mabinogi*’）の中で活躍する女性像に焦点をあてて、その背後に見え隠れするケルトの女神たちの姿を考えてみる

最初のグループ「四つの物語」を統括する共通の主人公は、若者ブレデリ（*Pryderi*）である。第一話では彼の誕生・喪失・回復の物語が、二話では彼の若い頃の冒険が、三話では彼の二度目の喪失と発見が、そして四話では彼の死が語られているからである。したがって、この一組の物語は、まさにブレデリという若者の一生をたどる物語であり、主として彼の「幼な物語」（‘*y Mabinogi*’）、すなわち「子ども時代」を意味するラテン語の「インファンティア」（‘*infantia*’）を語ったものであると言える。しかしながら、はなはだ興味深いことは、この主人公ブレデリの姿が表舞台に出てくることはなく、あくまでも表題に現れる主人公たち、プイス（*Pwyll*）、ブランウェン（*Branwen*）、マナウイダン（*Manawydan*）、そしてマース（*Math*）たちの活躍を描きながら、各物語で語られるそれぞれのエピソードの裏に、ブレデリの存在が見え隠れしていることである。同様にまた、全ての事象の背後には、それらをまとめ、支配している運命的な力が存在しているという、ケルトの民に共通した考え方も見られる。そしてその力というのは、男たちの表舞台での活躍を支え、ひっそりと、しかしきわめてし

たたかに生きているケルトの女たちが担っているのである。そんな女性たちの存在感が圧倒的な大き
さで迫ってくるのもまた、ケルト人の社会と文化の特色の一つである。ここではプレデリの誕生に直
接かかわってくる神秘的な女性リアンノン (Rhiannon) と、魔法の力を使って彼を滅ぼしたグウィデ
イオンの妹にあたり、彼の死の背後の物語に登場するアリアンロド (Arianrhod) (またはアランロド
(Aranrot))、そして巨人ベンディゲイドブラン (Bengigeidfran) の妹にあたり、悲しみのために胸が
張り裂けて死んでしまう悲劇の女ブランウェン (Branwen) という三人の女主人公たちをとりあげて、
考察を進めることにする。

1) リアンノン (Rhiannon)

リアンノンの活躍するのは、「四つの物語」の中の第一話と第三話の中である。

第一話においてリアンノンは、ダヴェドの長プイスの妻、「四つの物語」を貫く統一主人公プレデリを
産んだ母として登場し、第三話においては、この物語の主人公マナウィダンの妻となり、息子プレデ
リと共にダヴェドの地より忽然と姿を消してしまう母として登場してくる。結局この第三話において、
最後には、リアンノンの二度目の夫であり、プレデリの義父となったスィールの息子マナウィダンの
努力によって、この一旦は地上の世界から失われた母と子 (モドロン (Modron) とマボン (Mabon))²⁾
は無事帰ってきて、ダヴェド全地に再び繁栄と豊穡が戻ってくるということになっている。

A. 恋の成就を図る女 (第一話から)

リアンノンの登場の様子は、なかなか興味深い。

宴会での食事のあと、アルベルスの丘の上に座って、何か不思議が起こるのを待つダヴェドの大公
プイスの目の前に、青白い馬に乗り、金色の絹の衣をつけ、顔をヴェールで覆った一人の女が現れる。
素性を尋ねるために差し向けた家来たちは、誰も彼女の馬に追いつくことができない。こうした再三
にわたる無駄の努力に末、思い余ってプイス自身が声をかけると、即座に馬は歩みを止め、彼女と話
をすることができたのだ。女は古老ヘフェイズ (Hefeydd Hen) の娘リアンノンであると名乗り、
心にそまぬ男との結婚を逃れて、自分の慕うプイスの気持ちを確かめるためにここにやってきたのだ
と語る。

考えてみれば、これはまことに奇妙な話である。まず第一に、リアンノンは一体どのようにして、
意中の恋人というプイスと出会ったのだろうか。しかしながら、彼女がプイスを見初めたのは何時の
ことで、またそれは何処でのことであったのかといった問題には、物語は一切答えてはくれない。し
かし『マビノギオン』の他の物語においても、熱烈な恋に身を焼く恋人たちの場合、その恋の思いの
発生はきわめて唐突である。例えば、「キルッフとオルウェン」の物語においては、若者キルッフは、
継母の話の中に表れるオルウェンという乙女の名前を聞いたとたん、彼女への激しい思慕の情に捕ら
われることになっている。また、「マクセン・ウレデグの夢」の物語においては、ローマの皇帝マクセ
ンは、夢の中に現れた、何処とも定かでない町に暮らす幻の美女に恋して、ローマの地から遙々とブ
リテン島までやってきて、めでたくエウダヴ (Eudaf) の娘エレン (Elen) を妻にするのである。しか
し、この「プイス物語」においては、リアンノンの恋心の生まれた由縁について一切語られていない
ということと共に、この恋の始まりが、女性の方からの積極的な働きかけから始まったという、他の
物語との決定的な違いがある。ヴェールをとったリアンノンを一目見ただけで、プイスの方も彼女に
恋をし、自分も彼女を妻に選びたいと思い、しかも一時も早くそうしたいと申し出るのであるから、
この二人の男女の恋愛が相思相愛の関係になったことは事実である。しかし、彼らの場合、結婚まで
事を運ぶについては、終始リアンノンという女性の方が主導権をとって進められてゆくという特徴が

ある。

「四つの物語」の第一話のテーマが、ブレデリという主人公の誕生にまつわる様々なエピソードを語るということにあるのだとすると、この英雄ブレデリの父となるプイスにも、生身の男性には望めない、かなり優れた特徴がなければならない。「ブレデリ物語」の最初のエピソードは、ダヴェドの七地方を治める領主に過ぎなかったプイスが、いかにしてケルト人の黄泉の国アンヌウヴン（Annwfn）の王アラウン（Arawn）の知遇を得、彼の代わりに宿敵ハヴガン（Hafgan）と戦い、彼を倒してアンヌウヴンの長プイスとなったかという話が語られている。

一方ブレデリの母となるリアンノンという女性は、古老ヘヴェイズの娘となっているが、一体この古老ヘヴェイズというのはどんな人物で、何処に住んでいるのかといった詳しいことは一切語られておらず、終始謎の女性のままに留まっている。二人の結婚までの経緯には、様々な困難が待ち受けていた。しかしそれらの一つひとつは、いずれもリアンノンの適切な判断によって克服され、プイスは、恋敵クリド（Clut）の息子グワウル（Gwawl）を退けて、愛するリアンノンとめでたく結ばれたのであった。結婚までの経緯の中で最大の危機は、請願に訪れた恋敵グワウルへ、プイスがうっかりと、何でも自分の自由にできるものなら差し上げようとしてしまった結果、あやうくリアンノンを譲らなければならない羽目に陥るといった出来事である。その時のリアンノンの適切な判断、すなわちグワウルへ一年後の祝宴の開催の約束を与えると共に、プイスへは、入れても入れても決して一杯になることのない「袋」を与え、もう一度、一年後に出直してくるようという助言等を見ても、結局のところ、全て彼女が主導権をとっての二人の恋の成就であったことが分かる。それを端的にしめしているのが、リアンノンのプイスに対する、次のような非難の言葉であろう。

「そうやって、お好きなだけ黙っていらっしゃるがよろしい。あなたさまのように、思慮の浅い振る舞いをなさる方もありますまい……。あのようにお答えになったからには、もうこれ以上そのお身の上に、不名誉の汚名が降りかからぬよう、わたくしをあの方にお譲りなさいませ。あとは、わたくしにまかせていただきとうございます」。(34)

B. 苦難の母（第一話から）

こうして結ばれたプイスとリアンノンの間に、四年後、待望の一人の息子が生まれる。しかし息子の誕生直後から、母となったリアンノンには、様々な苦難が降りかかる。

まず、生まれただけの息子は、忽然と姿を消してしまい、お付きの女たちの悪巧みによって、リアンノンは子殺しの冤罪を償わなければならなくなる。しかしここで不可解なのは、何故彼女が、侍女たちの主張に最後まで抵抗することなく、身に覚えのない罪の償いをするという日々黙って耐えていたかということである。ただ単に、1対6という、多勢に無勢の数の上の問題だけでもないように思われる。そしてまた彼女の償いの行為というのも、甚だ奇異なものであった。7年の歳月が経過する間、毎日宮殿の門の脇に置かれた、馬に乗るときに使う踏み台のところに座って、通りかかる人々に犯した罪の説明をし、望まれればその人を背に乗せて、宮廷まで運ぶというものであった。こうして、登場のときといい、償いの行為のときといい、リアンノンの背後には常に馬の影が見え隠れしているのである。

一方姿が見えなくなったリアンノンの息子は、グエント・イス・コイド（Gwent Is Coed）の領主テイルノン（Teirnon）という人物に拾われ、自分たち夫妻の子供として大切に育てられる。その子が発見されたときのエピソードにも、馬との密接な関連がある。この子どもは、毎年五月一日の晩、母親の雌馬のもとより姿を消してしまう生まれただけの子馬の行方を見届けようと、見張りをしているテイルノンに、発見されることになるからである。一歳の誕生日が来るときには既に三歳の子ども程

の大きさに、また二歳になると六歳の子ども程の大きさにというふうに、飛躍的な成長を遂げるというのも、この子が、民話にしばしば登場する不思議な子どもの系統を引く者であることを示している。そして、その様子がもう誰の目にも明らかな如く、プイスの息子であると分かったとき、この子どもは、あの晩連れ去られることなく、初めてテイルノンの手元に残った件の子馬にまたがって、父プレデリと母リアンノンのもとへ帰ってくる。このように、母リアンノンにしても、その息子にしても、二人の周囲には、常に馬のイメージが重なっているのである。リアンノンの上に、ケルト神話の女神の女王リガントーナ (Rigantona) と馬の女神エポナ (Epona)³⁾の姿を見ることができるといえる考えも、あながち無視できまい。

宮廷に戻った子どもは、プイスの宮廷に集う有力者の面々の前で、プイスとリアンノンとの間に生まれた息子であることが認められ、その場で正式に名前がつけられる。

その時発せられたリアンノンの言葉は、次のようなものであった。

「もしそのお話が真実だとすれば、これでわたくしは、プレデリ (心配) から解きはなたれると申すもの」。(50)

実母の発したこの言葉から、プレデリと名づけられた子どもは、ただちにペンダラン・ダヴェド (Pendaran Dyfed) という男のもとに、養子に出されて育てられる。ウェールズ語の「ペンダラン・ダヴェド」というのは、「ダヴェド地方の長」という意味である。こう考えてくると、リアンノンには馬の女神エポナの影が濃厚に重なり、ケルト古代神話の「偉大な女王」を、そしてテイルノンは彼女に対置する「偉大な王」を指し示しており、その結果、このプレデリという「四つの物語」に共通した主人公には、人間の父プイスの他に、神話上の教父テイルノンと、地上の有力者、養父ペンダラン・ダヴェドの存在とが不可欠とされているということが分かる。

C. 再婚と失踪 (第三話から)

さて、第二話「ブランウェン物語」に描かれた、イウェルズン (Iwerddon)、すなわちアイルランドでの戦いから帰ってきた僅か七名の戦士の中に、この物語の主人公マナウィダンとプレデリの姿もあった。そしてプレデリのたつての薦めで、マナウィダンは、プイスの死後未亡人となっていたリアンノンと結婚することになる。

マナウィダンはリアンノンと話をするうちに、「身も心も、この女人へのやさしい想いであふれんばかりとなった。そして、心中、今までかつてこれほど美しく快い女人には会ったことがない、と思うようになった」(79)と記述されている。マナウィダンに母を薦めたときのプレデリの言葉の中にも、リアンノンの魅力の一つが、彼女の美しさと共に、会話の能力にあったことが示されている。

「語り合っただけの方ほど楽しい婦人にお目にかかったことはありません。女盛りでいらしたころ、あの人ほど美しい女人はおいでにならなかつた。今でさえ、ご容色に失望なさることはありますまい」。(78)

しかしたとえその言葉のとおりであったとしても、リアンノンはプレデリの母、すでに相当の年齢の婦人であるはずである。彼女が、永遠に歳をとることのないと言われる妖精の女であったことを思わせ、リアンノンの出自の謎をあらためて垣間見させるところであろうか。彼女が、もともとはこの世の者ではなく、異界の女であったことが思い起こされる箇所である。

やがて、プレデリと彼の妻キグヴァ (Cigfa)、そしてマナウィダンとリアンノンという二組の夫婦は、不思議な体験をすることになる。彼らが狩りをしていると、深い霧が突然降りてくる。その霧が上がった後、アルベルスの丘で自分たち4人だけが、無人化してしまったダヴェドの地に残された、唯一の生き物であることを思い知らされるからである。こうしてやむなく二組の夫婦は、四人だけの共同

(253)

生活を始めた。しかしある日のこと、ブレデリは、突然飛び出してきた白い猪を追っていたとき、マナウイダンの制止を振り切って、目の前に忽然と現れた砦の中へ一人で入ってゆき、そのまま戻っては来なかった。慎重なマナウイダンは妻たちのところへ帰り、事の顛末を報告する。息子の失踪を知ったリアンノンは、ブレデリを置いて帰ってきたマナウイダンを責め、ただちにその砦に出かけてゆく。そして砦の中庭で、泉の縁の大理石の上に据えられている鎖に繋がれた黄金の鉢に手を置いたまま、声も出ないで立ち尽くしているブレデリの傍に駆け寄ると、息子同様、自分もまた鉢に手を吸い付けられてそこから動けなくなってしまった。

結局この物語では、思慮深く、しかも穏やかに、物事を一つひとつ解決してゆくマナウイダンの適切な行動と努力によって、失われていた母と子の姿がめでたく地上に戻ってきて、同時にダヴェドの地にかけていた魔法も解かれ、この地に繁栄と豊穡が再び巡ってくるという話になっている。この魔法は実のところ、プイスとリアンノンとに敗れた恋敵グワウルの恨みを、彼に代わって晴らしてやろうとした、友人スイウト (Llwyt) がかけたものだったのである。こうして、この物語は、主人公ブレデリが母と一緒に、二度目の喪失から戻ってくるエピソードを語る物語となっている。

この物語に先行する第一話で登場する、行動する女リアンノンのイメージは、息子の失踪を知ったときの彼女の言葉と、その後の行動からも窺うことができる。

「本当にあなたさまは、とんでもないお仲間であらうしゃいますこと。それにしても、またとないよい友をなくしておしまいになったもの」。(86)

こう考えてみると、「四つの物語」の主人公ブレデリを産んだ女リアンノンという女性が、常に独力で積極的に運命を切り開いてゆく、きわめて強い女であることが分かるのである。彼女に比べると、ブレデリの父であるとされるプイスの存在そのものは、甚だ心もとないものである。それは背後に神話の影が窺える女神リアンノンと、あくまでも人間の男に終始するプイスの違いからくるということもできるかもしれない。

しかしながら、良く眺めてみると、第一話と三話のリアンノン像には、明らかに大きな変化がおこっていることが分かる。それまでの、自分の感情に溺れることなく、あくまでも理性的に、沈着に事を進めてゆく女性の姿が薄れ、代わりに感情にかられて息子の救済を急ぐ母の姿が色濃く現れ出てくるからである。人間の世界であるこの世での生活が、別世界である異界の女リアンノンの神性を薄め、ひたすら息子の安全を願う母性の象徴へと変化していったためであろうか。リアンノンはこのようにして、母性のもつ光(祝福)の部分を示す、永遠の母性のイメージを体現する女性像となっている。

第二話「ブランウェン物語」においては、リアンノンの直接の登場こそないが、生きているものを忘我の世界へ、そしてまた死者たちをもよみがえさせるという、「リアンノンの鳥」に言及することにより、彼女の持つ不思議な力を、再び示すことになる。アイルランド人との熾烈をきわめた戦いの末、足に毒槍を受けて致命傷を負ったベンディゲイドブランは、首を切り落とされ、7人の戦士たちと共に、87年にわたる放浪生活を送る。その間、宴の間中、彼らの耳には、夜な夜なリアンノンの鳥たちの甘美な歌声が聞こえてきて、全ての憂さを忘れて楽しむことができたというのだ。このようにリアンノンは、アイルランドから持ちかえったブランの首と共に、放浪する戦士たちの旅の生活を慰めつづけて戦士たちの守り手となる、ケルトの女神の姿を具現する女人の一人である。

2) ブランウェン (Branwen)

「マビノーギの四つの物語」の第二話に登場するブランウェンは、ブリトン神話のスイール (Llyr) の神の家系に属する娘である。巨人のブラン (またはベンディゲイドブラン) とマナウイダンは彼

女の兄たちであり、ブリテン島の三大女家長の一人と言われるほどの権威を持ち、その名前「白い胸」(‘bron’+’wen’) が暗示している如く、当時もっとも美しいと目される娘でもあった。その噂を聞き及んで、遠くイウエルゾン (=アイルランド) から求婚にやってきたマソルッフ (Matholwch) と結ばれ、間もなく一人息子のグウェルン (Gwern) にも恵まれる。しかしこの家庭の幸せの全てを象徴するような彼女が、スィール一家の問題児、異父兄にあたるエヴニシエン (Efnysien) によって、その幸せな結婚生活も、愛する子どもも台無しにされるという、悲劇の主人公となってしまった。結婚という絆によって、イウエルゾンと「強者の島」と言われたブリテン島を結び、いっそう強力な世界を築く存在となるはずであった彼女が、あろうことか二つの島を徹底的に荒廃させる原因になってしまったからである。

嫁ぎ先のイウエルゾンの地で、外国人であるということと、親族の働いた無体のゆえに人々の排斥にあい、課せられた幾多の迫害にも耐え忍び、自分の眼前で我が子を焼き殺されるという、過酷極まる運命にも耐え抜いたブランウエンであったが、戦争から生き残ったブリテン島の7人の男たちと、やっとのことで故郷のアングルシー (Môn) の地まで帰り着き、遙か彼方に浮かぶイウエルゾンの島を眺めたとき、自分の存在によって心ならずも起こってしまった悲劇を思っ、て、心臓が悲しみに張り裂け、この地で命を落とすと描かれている。

「ああ、神の御子よ。なんと悲しいことでしょう。まこと、このわたくしが生まれてきたこと自体が、悲しいことだったのです。わたくしのために、この二つの良き地が荒れはててしまったのですから」(72) という彼女の言葉は限りなく重い。こうしてスィールの娘ブランウエンは、アラウ川の岸辺につくられた、四面の墓に葬られ、二つの島を眺めるこの地で今もなお眠りについていると「マビノーギ」は述べている。

有力な神の一家の娘として生まれている彼女が、物語の中で神的な力を振るうことは一切ない。当時の結婚の風習にしたがって、一族の男たちの承認のもとに結婚し、異国での排斥と、夫の寝室から追い出され、毎晩仕事を終えた後の肉屋の平手打ちを受けるといふ恥辱にも耐えた彼女であった。しかしそんな彼女も、何とかして自分の運命を切り開こうという努力と自尊心を、最後まで放棄したわけではなかった。外界との全ての交流を絶たれた閉塞状況の中でさえ、三年にわたってムクドリを飼い馴らし、ブリテン島の兄のもとに苦境を知らせている。そしてまたイウエルゾンへ進軍してくる異様な一団の判断を、アイルランドの人々から仰がれると、

「わたくしは、とても妃などと呼ばれるような者ではありませんが、それがなんであるかは、よく承知しております。わたくしの不幸と恥辱とを耳にした強者の島の人々が、こちらへ渡ってまいるのです」(65-6) と誇らかに答えている。

巨人ベンディゲイドブランに率いられ「強者の島」(‘Ynys y Cedeirn’) すなわち、カムリ (Cymru) からやって来た兵士たちの働きにより、すっかり羽振りが悪くなったイウエルゾンの苦境を救って、和平のとりなしをしたのも、この地がすっかり荒廃してしまうのを恐れたブランウエンであった。しかしこの折角の和平の宴は、またもや異父兄エヴニシエンの暴挙で粉々にされてしまう。目の前で愛する息子が炎の中に投げ込まれるのを見た母ブランウエンは、自分もまた火の中に身を投じようと走り出る。しかしそんな彼女は、傍らに座った兄ベンディゲイドブランの片手で、しっかりと抑えられてしまうのである。

「悲しみの女」、「愛の女神」というのが、後世の人々がこの薄幸の美女ブランウエンに贈った名前であった。キリスト教到来後の悲しみの女、聖母マリアのイメージを一身に負った、ケルトの女性像である。

3) アリアンロド (Arianrhod)

ダヴェドの大公・アンヌウヴンの王プイスの妻であり、ブレデリの母でもあったリアンノン¹⁾は、後にスィールとペナルディン (Penardin) の間に生まれたマナウィダンの妻となる。こんなリアンノンは、ウェールズ神話の中に登場する二つの神々の系列のうちの、スィールの神々と深い関係を持つ女性であった。そしてまた「悲しみの女」とされるブランウェンもまた、スィール系の女性である。

これに対して、第四話で活躍するアリアンロドは、ブリトン神話のもう一つの神の系列、ドーン (Dôn) 系の神々²⁾の直系の女性であった。

彼女はベリ (Beli) (死の大王) とドーン (母なる女神) との間に生まれた8人の子どもたちの一人であるとも考えられている。その子どもたちの中でも、第四話で活躍するグウィディオ³⁾が科学と光を司る者であるのと並んで、アリアンロドの方は「銀の輪」を司る曙の女神として大きな位置をしめる存在である。この第四話におけるアリアンロドという女性の活躍を、次の二つの面から考えてみることにしよう。

A. 処女性をためされる娘

物語の中にアリアンロドが初めて登場するのは、叔父にあたるマース (母ドーンの夫) の足乗せ人候補として、兄グウィディオの推薦を受け、マースの宮廷へやって来る場面である。戦争のときを除いて、マースは宮廷で憩うとき、いつも乙女の膝のうえに自分の足を置いておかないと生きていけないという奇妙な運命にあった。このような老王と若い娘の関係については、ケルト神話に限らず、古い物語の中にしばしば見られる話である。老王の足が男性の性器を、娘の膝が女性のそれを象徴するとも考えられ、若い娘の生命力を、力の萎えた王に補給するというエピソードの一つと考えられている。ある日のこと、甥に当たるギルヴァエスウィ (Giluathwy) が、それまでマースの足乗せ人をつとめていた娘ゴイウィン (Goewin) に懸想し、兄グウィディオと謀をめぐらして、彼女を凌辱してしまった。そのため、代わって役目を勤める乙女として、アリアンロドが推薦されたのである。しかしながら、彼女はマースの魔法の杖を跨ぐという処女性を確かめる試みに失敗してしまう。並いる貴族たちの前で、彼女は赤ん坊を産み落とし、自分が既に処女ではないことを暴露してしまうのである。赤ん坊のうち一人は、マースに引き取られ、ディラン (Dylan) と名づけられて成長し、海の神の性質を持つ若者に育った。しかしアリアンロドは、あわてて宮廷を出てゆく際、戸口のところでもう一つ何かを落としてゆく。一同が何であるかを確認する前に、グウィディオがそれを素早く取上げ、絹の布に包んで、自分のベッドの足元の小箱の中に隠してしまった。やがて、それがもう一人の男の赤ん坊であったことが判明する。この子どもは、グウィディオの特別の配慮を受けながら、すくすくと成長した。その成長の速度は、ブレデリのときと同様極めて早いもので、この子の出自が普通の人間のものではないことを示していた。やがて、少年はグウィディオに連れられて、母アリアンロドの住む城塞へ向かう。

グウィディオは、出迎えたアリアンロドに、この少年こそ、彼女の息子であると告げる。さぞかし喜ぶかとおもいきや、それに答えての彼女の言葉は、つぎのような衝撃的なものであった。

「まあ、なんということ。こんなにも長い道のりを、わたくしに恥をかかせるために、わざわざあなたがみえるとは。わたくしの恥を追いつづけて、これほど長いあいだ、それを覚えておいでとは」。(115)

アリアンロドの言う彼女の恥というのは、一体何であったと考えればよいのであろう。臨月の女が、処女であることを確かめる試みを受けること自体、普通は考えられないことであるし、彼女が試みに

失敗したあと、その場で二人の赤子を産むこともまた異常な事態である。しかし、物語は何の説明も加えようとはしない。その後アリアンロドは、グウィディオンに向かって、この少年を「あなたの息子」と呼んでいる。とすると、この少年こそは、グウィディオンとアリアンロドの息子、おぞましい兄妹間の近親相姦の結果、生まれた子どもであったとも考えられる。前述の彼女の言葉も、忘れよう忘れようとしているこの事実を不意につきつけられて、怒り惑う女の気持ちがよく出ている言葉であるとも解釈できる。そう考えると、「乙女よ、そなたは、まことの乙女であるか」という質問に答えての、マースを欺いた言葉と受け取られている白々しい彼女の返答、「そのほかのものではありませんね」(113)という言葉もまた、理解する事が可能となるのではないだろうか。処女であるか否かという認識も、当事者である女自身にとってみれば、さしたる大問題ではなく、きわめて個人的・主観的なものであるのかもしれない。確かにこのときのアリアンロドは、他の者の判断はどうであれ、自らを処女であると認識していたと思われるのである。古い風習に挑むような、「そんなことがそんなに重要なことなのでしょうか。どうぞあなたの好きなようにご判断なさいませ。私自身は乙女に違いないと思っております」とでも言いたげなアリアンロドの、新しい女としての主張が垣間見られるところである。その確信を公衆の面前で、無残にも踏みじられた彼女の屈辱と憤りは、想像に難くない。しかも彼女は、そう答えることによって、その客観的判断を全て質問をしたマース本人にまかせ、肯定も否定もしてはいないとも考えられる。一人の女が自分の主体性をかけて語り、行動するという姿を、このようなアリアンロドの言動ではっきりと示しているのが、ドーン系の神々の活躍が目立つ、第四話の語りの特徴の一つでもある。

B. 呪いをかける母

生命を生み出し育て、慈悲なる母性が存在する一方で、その生命を飲み干し死滅させる、暗黒の母性もある。母という性のもつ、相い反した側面を、この「四つの物語」は見事に映し出している。第一話、そして第三話のリアンノン、第二話のブランウェン等はいずれも母性の明るい正の部分を示す例と考えられる。中でも、ひたすら周囲の人々の平安と幸せを祈る、前述のスィールの娘ブランウェンの悲話は、読む者の上に強烈な印象を残し、不運な母の姿を人々の脳裏に刻みつける。目の前で、しかもあろうことか自分の兄弟の手で、愛する息子、疑いをしらない無邪気な幼子が、燃え盛る火の中に投げ込まれの見なければならなくなった母。思わず飛び出して息子を助けようとする彼女は、もう一人の兄ブランの手で阻止され、自由を求めてもがきながら、むざむざ息子の死を見届けるだけだったのだ。嫁いだ地イウェルゾン（アイルランド）と故郷カムリ（ウェールズ）、この二つの地を一度に見ることのできるモーン（アングルシー島）に辿り着いたとき、自らが原因となって引き起こされたこの不幸な結果を思って、心臓が張り裂けてしまったという彼女の最後も無残である。美しくも悲しい彼女の一生を思うとき、ブランウェンが、人々に「愛の女神」と呼ばれて、今もなお圧倒的親近感を持って、ウェールズの人々の間で慈しまれているのもっともなことである。ケルトの人々の愛の認識には、こうして常に悲哀の要素がつきまとう。

以上のような母性の正の部分に対して、アリアンロドの物語は、母性の抱え持つ負の部分を示している。彼女は息子に次のような三つの呪いをかけることによって、自らが産みだした存在そのものを打ち消そうとするからである。相手の存在を呑み込み、手も足も出ないように窒息させてしまうような母性、その凄まじいまでの、彼女の呪いのさまをしてみることにしよう。

i. 名前の拒否（自己認識を阻む母性）

人がその親からもらう最初の、そして最大の贈り物は名前であろう。この物語には、その祝福を、当の母親自身から拒まれた、不幸な若者が登場する。アリアンロドの次の言葉ほど残酷な呪いを、人

(249)

は今までに耳にしたことがあったであろうか。しかもそれが、自分をこの世に産み落とした当の母親から聞くことになろうとは。この若者の一生が、どんなにあがいても、決して幸せなものとはならないだろうという予感が、もう既に心に湧いてくる箇所である。

「それではわたくしが、この子に、一つの宿命を授けてあげましょう。このわたくし自身が名づけぬかぎり、この子は名前というものをもつことができぬ、という宿命を」。 (115)

しかしグウィディオンの必死の努力によって、この若者は、母からスエウ・スアウ・ゲフェス (Lleu Llaw Gyffes) (「器用な手を持つ金髪の子」という名前を与えられる。けれど所詮この名前は、奸計によって無理やりに彼女から、いわばもぎ取られた名前であり、母親の祝福からは程遠い贈り物だったのである。己の母親から、自己確認のための最初的手段である名前を拒否された、不運な主人公スエウ。しかしともあれ彼は成長し、グウィネス全体を統治する領主となった。

ii. 武器の拒否 (戦う術を奪う母性)

戦うこと、武力で人を制し領土を拡張してゆくことが、最大の関心事であった時代の少年にとって、戦う手段である武器を与えられないことぐらい、悲惨なことはなかったであろう。スエウは、その武器を決して手にすることができないという呪いを、生みの母からかけられる。

「では、わたくしはこの子に、わたくし自身がもたせてやらぬかぎり、どんな武器も身におびることとはできない、という宿命を授けてやりましょう」。 (118)

しかしグウィディオンの策略によって、若者は、母から武器を与えられることになる。けれど、これとても、母が自発的にそうしたわけではない。いわばグウィディオンの奸計と彼の魔法の力に欺かれて、生母が心ならずも与えた武器だったのである。スエウはその後、この武器を使って華々しく戦い、領地をみごとに治める領主になった。しかし、彼の運命に覆いかぶさる母の呪いは、いつまでも陰りとなって、息子の生涯についてまわる。

iii. 妻の拒否 (生命連鎖を断ち切る母性)

こうして名前と武器とを得た若者に、最後の決定的な呪いがかけられる。それは、妻が持てないという運命である。

「そういうことならば、わたくしがこの若者に、もう一つの宿命を授けてやります。それは、この地にあるいかなる種族の女からも、この若者が妻をめとることかなわぬ、というものです」。 (121)

グウィディオンの、「いやはやあなたはなんというよこしまなおひとだ。これ以上意地の悪い方もあるまい」 (121) という言葉が身につまされてくるような、凄まじいまでの母親の呪いである。

しかしこの母の呪いも、グウィディオンの叔父マースの努力によって、三種類の花から集めたエッセンスで類稀な美女を作り、その娘が妻として彼に与えられるということで、解かれることになる。ここに新たな女主人公、櫻の木に咲く (デリ) 花、エニシダ (バナディル) の花、そしてシモツケソウ (エルウァイン) の花から作られた乙女プロダイエズ (Brodeuedd) が登場する。しかしこの美しくも芳しい女人によって、またしても若者スエウは裏切られ、驚に姿を変えて骨と皮ばかりの哀れな様子になるまで、流離うことになるのだった。しかしながらこのときもまた、グウィディオンの並々ならぬ努力によって、スエウは元の姿に戻され、プロダイエズと共謀して自分を襲ったグロヌウ (Gronw) を撃ち取ることになる。一方ふくろうに変えられた不実なプロダイエズは、森へと追放される。しかし、一旦は妻として慈しんだ女が夜毎にあげる鳴き声を、スエウはどんな思いで聞いたのであろうか。一目グロヌウを見つめた途端、全身が彼への熱い思いで一杯になったと記されているプロダイエズの、グロヌウへの燃えるような熱い恋に対して、余りにも寒々としたスエウの愛情生活の様子が浮かんでくる。一見勝利者のように見えるスエウの、冷たく寂しい姿が脳裏をかすめ、母親アリアンロドの高

笑いが何処からか響いてくるようである。

ここにリアンノンという母親の愛情を一身に受けた、南ウェールズ、ダヴェドの領主ブレデリに対して、アリアンロドという母親の呪いを全身で受けた、北ウェールズ、グウィネズの領主スエウの姿がある。しかもこの第四話において、「四つの物語」の主人公ブレデリは、他ならぬスエウの後見人(彼の父親か?)グウィディオンの魔法の力の前に敗北し、命を落とす運命にあった。その様子を本文は、「力と勇気と魔法と呪術とによって、グウィディオンの勝利をおさめ、ブレデリは打ち倒されてしまったのであった」(108)と記述している。これはまた、海の神の系列を引くスィールの神々に対して、荒ぶる河川と天体をおさめる魔法の力をもったドーン系の神々の勝利といえるかもしれない。

こうして南ウェールズの21の地方の領主ブレデリは破れ去り、結局最後に、スエウが北ウェールズのグウィネズ全体を統治する領主になったと物語は結ばれている。

しかし興味深いことは、今でも人々の共感を呼び、深い感慨をもって語り継がれているのは、敗北したブレデリや薄幸の美女ブランウェンなどにまつわる話。魔法の力を駆使して勝利したドーン系の神々に連なる主人公の物語ではなく、敗北を喫した側のスィールの神々に連なる主人公たちの話なのである。というのは人々の生活する村の教会の片隅や、人々の立ち働く野原に存在して、今もなおその地の人々の生活の傍らに確かに生きつづけている彼らの物語を伝える痕跡に反して、海がないだ折などに、ときおり、海中にその影を映して現れてくると言われるアリアンロドの砦などは、現実味の感じられない、あくまでも幻影の域を出ない存在であるからである。⁶⁾

リアンノンとアリアンロド、南ウェールズのダヴェド地方を治める領主ブレデリと、北ウェールズのグウィネズを治める領主スエウの母となった女神たち、そしてまた悲劇の女ブランウェンという、それぞれ神話の中の女神を連想させる三人の女性の活躍の他にも、この「四つの物語」には数々の忘れがたい女たちの姿が見え隠れしている

不倫の恋に身を焦がす花から作られたプロダイエズ、そしてまた第一話のブレデリ誕生のエピソードには、リアンノン母子の世話を任せられながら、自分たちが不覚にも寝込んでしまったうちに赤ん坊の姿が消えてしまい、その責任逃れのため、母親のリアンノンに無実の罪をかぶせてしまう6人の侍女たちが登場する。当然のことながら、彼女たちの言動には限りない憤りを感じはするものの、普通の人間の立場からすると、そんな彼女たちの姿に、自分の中にも確かに存在している、いつの時代にあっても変わらぬ人間の弱さを確認して、いささかの安堵の思いも覚えるのではないだろうか。やり切れなさは残るけれど、何とも親近感を感じさせる生身の女たちの姿が、そこに描かれているからである。また第三話に登場するブレデリの妻キグヴァも、そんな種類の女であるといえるだろう。彼女はブレデリとリアンノン親子が一度に姿を消し、マナウィダンと二人だけになったのを知ると、身の危険を感じて脅え始める。しかし彼女の場合、紳士的なマナウィダンの約束で、自分の心配が杞憂であったことを確認し、胸をなで下ろすことになる。このような、現代ではいささか自意識過剰のようにもとれる彼女の恐れも、妻を貸し与えることが最高の接待と考えられていた時代にあっては、ごく当然の心配であった。(アラウンがプウイスに、寝室と共に彼の妻も一年間貸し与えようとした第一話参照)一般的に女の地位は低く、あくまでも部族の男たちの庇護の下での女たちの存在であったからである。(アイルランドのマソルッフに、兄弟で協議してブランウェンを嫁がせた第二話参照)キグヴァ自身の考え方自体も、ひどく古風で保守的である。生計を立てるために仕事を選ぶマナウィダンに対する彼女の助言が、常にその身分に相応しいものであれということに終始していることから、自分たちの身分への並々ならぬ執着が窺われる。彼女が、世俗のしきたりや慣習を最高に重んじる、

(247)

普通の女であったことが分かる。

このように、『マビノーギ』の物語に登場してくる女たちの姿は、いかにも物語の女主人公らしく堂々とした神的人物から、ごく普通の人間的な価値観や人情の揺れのなかで右往左往する生身の人物まで、多岐にわたっている。話し手の巧妙な語りのなかで、私たちは一喜一憂しながら物語の展開を、まるで我がことのように楽しむことができる。ケルト神話の神々の大きな特徴は、彼らが人間の創造者ではなく、常に我々人間の祖先として考えられていたということにある。したがって、彼らの姿と振る舞いの中には、普通のケルト人たちの生活の全てが、色濃く投影されていた。神々といえども、数々の悪徳や美德から自由であるというわけにはゆかず、私たち人間と共に泣いたり笑ったりする存在と考えられていたのである。

北欧神話の宇宙樹ユグドラシル、このとねりこの樹は、それぞれ三本の太い根を、神々の国、巨人国、霧の冥界に張る植物であったという。そしてまたウェールズやアイルランドのような湿気の多いケルトの地では、突然降りかかる霧の帳の向こう側に、常に別世界が並んで存在していた。この帳を上げることを可能にするのは、熱い太陽の光であり、物語の魔法なのである。

ケルトの社会では、神々と人間は限りなく近い存在として、同じ空間に常に共存している。

注

- 1) 使用テキストは、中野節子訳・徳岡久美協力、『マビノギオン—中世ウェールズ幻想物語集』（JULA 出版局、2000）である。本文中の（ ）の数字はページ数を表す。
- 2) この「モドロンとマボン」という母と息子については、様々な言及があるが定かではない。母モドロンというのは、ケルト神話に登場する母なる女神マトローナ（Matrona）であると考えられ、その息子マボンは、マポノス（Maponos）から派生されたものであり、三題歌にはブリテン島の三人の追放の囚人の一人と記載されている。『マビノギオン』の「キルッフとオルウェン」の物語の中に語られるエピソードにも登場する。又『カマーザンの黒い本』（*Black Book of Carmarthen*）の中にある古詩「門番は誰か」（‘Pa Ŵr yw’r Porthor?’）の中では、勇将ウースル・ペンドラゴン（Uthr Bendragon）の召使として登場している。W. J. グリフィッツ（W. J. Gruffydd : 1881-1954）は、このマボンを第一話の主人公プレデリ（又はグウリ）と同一視している。
- 3) リガントーナは、「女王」を意味するゴール語のリガーニ（rigani）、又アイルランド語のリガイン（rigain）からきているとされ、ケルト神話に登場する女神である。又エポナも、もともとはケルトから発し、ローマ帝国の拡大によって、全世界に伝えられたと思われる馬の女神である。彼女は馬の守護神であるとされ、ブリテン島やゴール地方、またイタリアやバルカン半島等のヨーロッパ各地に散在する彫刻の中に、馬の間に座ったり、跨がったりしている女神として、その姿を留めている。両手に、果実の鉢や豊穡の角を捧げている場合が多い。
- 4) スイール（llŷr）は、ウェールズ語で「海」を表す。アイルランド語のレル（ler）（ただし属格ではリル（lir）になる）を想起させ、「海の神の息子」であるマナナン・マック・リル（Manannan Mac Lir）との関連が指摘されることが多い。マナウイダン、ベンディゲイドヴラン、ブランウェンの父にあたる神的人物である。後にこの人物像から、シェイクスピアの悲劇の主人公「リア王」（King Lear）が生まれたという説もあるが、真偽のほどは定かでなく、多分この場合、彼の名前は、地名レスター（Leicester）からきているのではないかと考えられている。
- 5) ドーン（Dôn）というウェールズ語の名前は、ケルト神話の女神ダヌ（Danu）、おそらくはダニューブ（Danube）川の女神であったドーナ（Donau）からきていると考えられている。グウイディ

オン、ギルヴァエスウィ、アリアンロドなど第四話で活躍する人物は、彼女の子どもたちであり、マースは彼女の兄、また『マビノギオン』の他の物語には、別の息子たち、ゴヴァンノン (Gofannon) とアマエソン (Amaethon) の名前も登場する。いずれも魔法を駆使する人物たちである。

- 6) ヴェレン・リッド (Uelen Ryd) の丘の上、マイン・テヴヤウク (Maen Tyuyauc) に葬られたといわれるブレデリの墓石というのが、マイン・トログ (Maen Twrog) の村の古い教会の玄関の傍に立っている。この石の由来については、また別の伝説がある。それは6世紀にブリタニーから渡来した聖人トログが、モエルウィン (Moelwyn) 山の頂上から、この村にあった異教の祭壇に向かって投げつけたのが、この石であるといわれているのである。その後この場所には、キリスト教の教会が建てられた。境内に残された石の上部には、彼の手の指跡とされる根跡が残っている。

ブランウエンの墓石は、エリム (Elim) という小さな村の、アラウ湖 (Llyn Alawa) から流れ出るアラウ川の河畔にある牧草地の中に、ひっそりと置かれている。これは19世紀の初頭発掘された、彼女の墓にあったものであるとされている。石は真ん中のところで、まっ二つに割れていて、悲しみのために張り裂けた彼女の心臓を思い起こさせる。

サンドログ (Llandwrog) 村の近く、カナーヴォン湾に面したディナス・ディンセ (Dinas Dinlle) は、母の呪いを受けた不幸な若者スエウが育ったところといわれている。近くの海岸にアリアンロドの岩があったとされ、現在はその姿を海の底に沈めてしまっているが、静かな風が続いたような折には、波の下に揺れる彼女の要塞が見えるという。しかしその様を実際に見たという人の報告はなく、あくまでも幻の岩に留ったままである。